

今回の体育部報は、岡崎市中学校総合体育大会と小学校運動会についてです。

総体で繋ぐ

岡崎市立矢作中学校 坂本 千秋

初めての体育主任。初めての当番校。私自身、何もかもがわからないまま慌ただしく今年度がスタートした。まず直面したのは、生徒にどのように伝えれば当番校の重みが伝わるのか。総合開会式がなくなった今、生徒にその偉大さ、素晴らしさを伝えることは難しいと思えたが、スローガンの募集を呼びかけた時に、「スローガンに込められた思い」について生徒たちが書く欄の文章量の多さに驚いた。生徒には十分に伝わっていた。それをうれしく感じるとともに、この熱い思いの中から絞っていくことの難しさを感じた。どれも捨てがたいスローガンばかりだった。うれしい悩みだ。それと同時に、どんなに長く体育主任をしても、当番校に当たるとは限らない中、初めて体育主任になった私がこんな貴重な経験をさせていただけるなんて、幸せだとも思えた。

そして迎えた激励会。「発て 繋げ 輝け UP! NEW STAR!」というスローガンを全校の前で披露した。このスローガンに込められた思いに恥じないように、さらにここまで受け継がれてきた岡崎市内全中学校の先輩方の思いを次の世代に繋げるために、今まで以上に頑張ろうという熱い思いが、各部キャプテンの決意の言葉の端々にも感じられた。それに対して、声を枯らしながら、まだまだ小さな体を目いっぱい大きく動かして応援する1年生の姿からも、総体に向かう先輩の強い気持ちが伝わっていることが確信できた。

約1か月続く、長丁場の総体。全校としては激励会を行ったが、毎週金曜日になると、その週末に大会がある部員に対しての激励会が各教室で行われていた。学級で、そして全校で一丸となって総体に向かう気持ちが感じられた。これから初戦を迎える部活動、初日を勝ち上がり次の日に繋げた部活動、敗退してしまった部活動、それぞれの立場が入り混じる教室内で、お互いのことを考えた言動が垣間見える日々の中で、さらに絆が深まっていくことを実感した。



全力トライ 満開の笑顔 岩津っ子

岡崎市立岩津小学校 内田 貴博

時代とともに運動会の実施方法が大きく変わってきている。しかしそこには必ず保護者、地域の方、学校職員、そして何より児童たちの強い思いが込められている。5月、本校では創立150周年記念運動会を行った。150歳を迎えた岩津小学校の記念の運動会である。

開会式前のオープニングでは、岩津天神太鼓の披露があった。岩津天神太鼓とは、岩津天満宮を拠点に活動している和太鼓グループの演奏である。大太鼓の地鳴りのような重低音と小太鼓の軽快なリズムが運動場に響き渡った。岩津小学校の児童以外にも、他校の児童や卒業生も参加しており、150周年を記念する運動会のオープニングを盛り上げてくれた。

岩津小学校の特色ある活動と言えばボール体操である。昭和51年に保健体育優良校全国表彰受賞の要因となったボールを使った体操。何十年も続いており、岩津小学校出身者にはなじみの体操



である。校歌をアレンジした音楽に合わせてボールを使って体を動かす。低中高学年それぞれ学年の段階に適した動きに分けられている。ボールは学年ごとに色分けされており、特に、ボールを投げ上げた時の鮮やかな色合いと、児童の生き生きとした表情は圧巻である。今年度は創立 150 周年を記念し、本校職員により音楽を現代風アレンジした。アップテンポかつ壮大な音楽から、新しいボール体操が生まれた。

運動会のフィナーレを飾るのは、今年は6年生の演技であった。全体のテーマを「命」とし、生まれてから今に至るまでの自身の姿を表現した。運動会1か月前から実行委員を立ち上げ、教師と児童で作り上げてきた。学年スローガンを「一致団結 心を燃やせ 全力で挑め 6年生」とし、ゴールデンウィーク前から個人練習が始まった。本番まで時間のない中、休み時間や家で自主練習をするなど、進んで練習に取り組む姿があった。また、練習の開始・終了時には必ず実行委員から学年に思いを伝えた。みんなで気持ちを高めていこうと努力する実行委員の強い思いを感じた。本番では、「一致団結 心を燃やせ 全力で挑め 6年生」を見事に体现し、会場中の視線を引き付けていた。練習に取り組む姿、本番の姿から6年生の熱い思いを感じ取ることができた。それは他学年の「自分たちも6年生のようにかっこよく演技したい」という感想や、演技を見ている表情からも伝わってきた。



創立 150 周年記念運動会を通し、「全力トライ 満開の笑顔 岩津っ子」の姿から、体育教師として大切にし続ける基盤を再確認することができた。

成長を次の成長につないでいく

岡崎市立三島小学校 島田 拓弥

三島小学校で、中学年演技の恒例となっている一天濤快。力強い演技に惹かれ、今年も一天濤快を踊ることに決めた。また、手具は鳴子を選んだ。練習の始めは、鳴子の音は全くそろわず、踊りのキレも皆無だった。中学年の担任でどうしたらもっと踊りが良くなるか検討を重ねていくうちに、一天濤快の歌詞に着目するアイデアが出た。歌詞の紹介をすると、子どもたちは「かっこいい」「むずかしい」と様々な反応を見せた。さらに調べ学習を経て、歌詞の中に徳川四天王の名前が入っていることや、当時の人々の生き様が歌詞に込められることを知り、踊りに思いが乗るようになった。練習の始めは決められたことだから言われた通りに踊っている、という印象だったが、練習を重ねるうちに、子どもたちから自然ともっと良くするためのアイデアが浮かんできた。動画を撮って確認をする姿もあった。与えられた踊りから、自分たちの踊りにしようという姿が見られ始めた。運動会当日には、全身を大きく使って、迫力のある演技を披露することができた。現在、学校教育では「主体的な学び」「協働的な学び」の実現を目指して教育活動を進めている。運動会でのより良い演技を作り上げていく過程を通して、子どもの主体性を育むことができたように感じる。行事を通して子どもが成長し、その成長を次の学習につなげていけるようサポートしていくことのできる教員であり続けたい。

